

57. 思い出話が即、歴史

1 代に何回もの水害を経験した摂津市域では古文書はほとんど伝わらないが、子供のころ祖父母から聞いた話からわが家や村の歴史はたどれる。これも日本史の一部だ。

鳥飼八町は鳥飼中から？

江戸時代から大正時代にかけては 1 代に 3 回ほど水害があつて、古文書を伝えることは難しい。むかし鳥飼八町は 45～46 戸で、地主は 2 軒、自作農が 10 数軒、小作が 20 数軒だった。いまは 60 数戸、分家で戸数が増加したのであつて他所者（たしよもの）はいない。

むかし鳥飼八町には今井姓が 4 軒あつた。鳥飼中にも今井姓が 3 軒ある。鳥飼八町は鳥飼中からの分村だという話がある。鳥飼八町の八町は八軒だったことを表している。

古文書がなくても

以上は鳥飼八町の I 氏（1927 年生れ）の話である。古文書のないところでも個々の家の本家・分家関係や何代前の人はどこそこから来たという昔の縁戚関係を伝承を丹念に集めていけば、江戸時代ごろの人口増加と分村関係をある程度復元することも可能であろう。

新在家は別府の分村であるという。他所者の聞き取り調査ではとても及ばないことだが、自分たちの手による歴史発掘に期待したい。古文書だけが歴史資料ではない。

綿屋で仏壇屋

幕末、嘉永元年（1848）生まれの善兵衛さんは仏壇を作つて仏壇屋をしていた。組頭、綿屋善兵衛と名乗った。その親の善五郎は綿屋、古物商、土木工事の許可証をもっていた。これは三島の K さん（1908 年生れ）の祖先の話。

農家でありながら、副業が本業のようになっている。大都市近郊、淀川という幹線交通路沿いの摂津市域では、江戸時代から農家であっても企業家精神は旺盛であつた。

米屋と綿屋で儲ける

江戸時代の後期、市五郎が分家して自立。その子市太郎は遊んで財を潰した。幕末の頃であろう。苦境の中で育つたその子由松は明治の初め 20 歳の時、地主から 5 円を借りて河内の二番で 3 間（5.4m）の舟を買い、安威川から神崎川・淀川を経て大阪に出て米を売り、綿を買ってきて京都まで売りに行った。この米屋と綿屋でもうけて 2～3 年で借金を返し、明治 10 年頃土地を買った。この由松の代で 4 町（4ha）となった。これは三島の K 氏が昔おばあさんから聞いたという話。浮沈の激しさに近郊農村の特質がみえる。

個々の家々の話をもっともっと集めれば、江戸時代以来、淀川沿いの摂津市域の農家のもっている潜在的可能性のすごさが浮かびあがってくるに違いない。

58. 正雀駅ができる

農村地帯の摂津市域では、何かを買うには吹田や茨木にでかけた。吹田に親戚があつて嫁のやりとりもあった。昭和3年、正雀駅の開設で村はパァーッと明るくなった。

買い物は茨木・吹田へ

茨木は古い町、問屋が多かった。乾物商など、茨木の太田のカラスキヤ（犁屋）でカラスキ（長床犁）を買った。

吹田の高浜橋は神崎川の船着場。「浜甚」「中川」「恩田」など船問屋が5～6軒あった。大きい米屋も3軒あった。「波善」が大きかった。

吹田の出口では短沫犁。出口の藤倉や高浜橋の鍋屋に首木を買いに行った（別府）。吹田の天道のカラスキヤは摂津市域の各地から長床犁を買いにいった。

正雀駅できる

三島の作物は米、麦（コムギ、ハダカムギ）、ナタネ、イチゴ。そんな普通の農村に、昭和3年（1928）、新京阪（阪急）の正雀駅ができた。

イチゴ狩り

昭和4年頃から、イチゴ狩りを始めた。大阪からイチゴ狩りの客がきた。大阪近郊でイチゴ狩りは鳴尾、恩知、そして正雀。駅から本町1丁目、味舌付近まで、イチゴ畑が広がった。イチゴは冬作、イチゴの苗は恩知（八尾市）から苗を買ってきて、肩引きの荷車で引いてきた。雨の時は客が来ないので、ジャムにした。

イチゴ狩りは昭和6～7年（1931～32）が全盛で、10年（1935）頃には終わった。いまも自家消費のイチゴは作っている（三島）。

駅前にカフェができた

正雀駅前のカフェができて、村の若いもんは出掛けた。昭和14年（1939）ごろから、家が建ちはじめた（三島）。

正雀駅ができてぐっと変わった。それまではカフェ、喫茶店は吹田まで行かなければならなかった。正雀駅をはそんで（挟んで）両側に3～4軒の喫茶店ができた。「みどり」「ルモワン」「喜久ー」などの店があった。夕飯すませてコーヒーを飲みに行った。18歳頃か。味舌の青年もここの青年もみんな集まった。

一杯のんでいい機嫌で歌うたって帰ってたこともあった。

「鳥くに」「しめのや」は金のある中年向きの料理屋。青年が立ち寄ると「コラッ子供はあかんぞ」と叱られた（庄屋）。